〔公卿補任 桓武〕延暦十五年丙子

從四位下　紀梶長（中略）後改名勝長、大納言正三位船守一男　性潤有雅量、好愛賓客、接待忘倦、饗宴之費不問出入、

〔近世畸人傳 四〕柳澤淇園

淇園柳澤氏、諱里恭、字公美、一號玉桂、通名權大夫、大和郡山同姓の士也、（中略）爲人曠達不拘、客を好みて、才不才をいはず、寄食せしむるもの幾人といふ數を去らず、あるひはかりそめに來たるものをも、年を經て還さず、家祿多けれども、これがために乏しきに至る、初某の年、侯使として、發極の御賀のため、都にのぼりしついで、大雅にまみへて相歡し、これより往來たへず、ある時大雅大和に行しに、路費盡たれば、假初に立よりて是を借るに、例の如くとゞめ門を閉て還さず、家臣又いふこと有、幸にとゞまりて內を好きるゝの病を諫給はれ、多慾のために身を亡し給んを憂といふ、こゝに大雅謀て其よしを說て曰、もし諫に從ひ給はゞ止らん、聞給ずば速に還んと、あるじ首をふりて、諫にも從はじ、還しもせじと、ます〳〵門を堅くして守らしむ、大雅終に裏の垣をこへて歸りしと也、

〔名家略傳 四〕增田鶴樓

鶴樓常に賓客を喜べり、酒肉席に絕ることなく、晝夜來るもの相屬けり、その先に至るもの、あるひは他に行かんことをおもへども、去ることを得せしめず、後なる者と雜然たり、日夕每に客常に滿ち、主人その中に起座し、衎然として歡び、夜に至れども倦ことなし、たま〳〵熟醉すれば、その席に在りて假寐す、少ありて寤れば、復人を呼て酒を命ず、迎へず送らず、必しも賓主の容を爲ず、おもふに蓋し相忘るゝをもて適意とす、客も亦その眞率を悅べり、至るものわが家に歸るが如くおもへり、鶴樓が主人もとより習ひて常とせり、深更といへども厨膳かならず辨ず、あるひは時として客の來らざることあれば、僮僕ら主翁の樂ざるを憂ひて、平生交遊する友の家に至